

08

PELSTE2021 (平和教育部門) の活動報告

※Peace Education and Lesson Study for Teacher Educator

活動の背景

2020年教育ビジョン研究センター(EVRI)は、INEI※加盟を記念して、また東アジアにおける教育学研究の拠点構築を目指してPELSTE2020を実施した。2021年は、広島大学学内INEI委員会とEVRIが連携し、前年度のノウハウと成果を継承し、またコロナ禍の影響を踏まえて、INEI加盟大学とオンラインで連携・交流を深める特別プログラム「PELSTE 2021」を企画、開催した。

※International Network of Educational Institutes



Purposes — 目的

- ① 広島大学が「平和教育」と「授業研究」の国際的な(東アジアの)研究拠点として発展し広く認知されるように、海外の研究者に同分野の研究・教育の動向と研究交流のプラットフォームを提供する。
- ② 共同研究のシーズを発掘するとともに、「平和教育」と「授業研究」の研究交流のためのデジタルコンテンツを蓄積する。さらに3年後のINEI年次総会・広島開催に向けての準備を進める。

Participant & Audience — 参加形態

参加者 3名 + 参観者計 60名

INEI加盟大学より公募。
平和教育部門3名、授業研究部門3名。
デジタルコンテンツを活用した事前協議を踏まえてシンポジウムで報告を行う。

Preparation — 平和教育部門プログラム (事前協議)

シンポジウムでの提案に向けて、3つのKey Questionsのもと、参加者は事前に共通のデジタルコンテンツを視聴し、協働して分析と議論を重ねた。

▶ Key Questions

1. 広島では、平和を、何のために、どのように教えてきたか？
2. あなたの国・地域では、平和を、どのように教えてきたか？
3. 私たちは、平和を、何のために、どのように教えるべきか？



▲事前資料はこちら

▶ 事前協議資料

広島の平和教育者のインタビュー動画
および有識者のコメント動画



広島県立広島観智学園中学校・高等学校
における平和教育実践(Global Justice)

▶ YouTube動画

Symposium — 平和教育部門プログラム (シンポジウム)

各地域のコンテキストを踏まえて、「平和教育」の意義と課題を議論した。

① コーディネーターによる趣旨確認



丸山恭司(PELSTE2021平和教育部門コーディネーター・学内INEI委員会委員長)より、事前協議資料として共有されたヒロシマの平和教育実践を、参加者それぞれの学術的・文化的・社会的文脈からレビューした上で、平和教育をどのようにリデザインしうるかについて議論したいとの趣旨が述べられた。

② 3名の参加者による提案



Cecilia Kyalo
University of Wisconsin-Madison
PELSTE Peace Education Forum
March 20, 2021

Participant commentary
I thank PELSTE for allowing us to learn about peace education in Hiroshima. From this workshop, I learned that peacebuilding is a long-term endeavor that covers across generations. I begin with a summary of the three interviews then proceed to commentary.
Ms. Maruyama describes his initial challenges as a peace educator and a survivor of the atomic bomb in Hiroshima. Initially, he assumed that sharing his experience would potentially affect his students to remain and check Hiroshima after reading his students' essays about it.



▲発表資料はこちら

セシリア・チャロ氏
(アメリカ・ウィスコンシン大学マディソン校)

平和について語る際の被害-加害の「二元論的極論への還元」に警鐘を鳴らし、諸アクターの関係を捉えるべきことを提起した。あわせて歴史の中の「ポリフォニー(多声性)」に耳を傾ける重要性を提起し、異なる「声」との対話を広島県立広島観智学園中学校・高等学校(HIGA)の平和教育実践に見出した。



PELSTE Peace Education Forum
March 20, 2021
Kevin Kester, Seoul National University
Participant commentary
First, I would like to thank the Hiroshima educators (and their students) for experience and expertise with us. It is always a joy to learn from others doing the impossible to achieve a better world through education. The commentary, queries, & questions that I will raise is a response to these very practical but also draw from my own theoretical thinking on the issue of peace education. I've some responses to the videos, and then turn to the theoretical thinking that offers a forward, for me, toward a more just and sustainable peacebuilding through education.
First, in the videos, there were a number of impressive elements that demonstrated peace education in practice. The other educators, Mr. Maruyama, spoke of his and



▲発表資料はこちら

ケヴィン・ケスター氏
(韓国・ソウル国立大学)

教育のあり方として、南半球や東洋の理論を西洋の思考を通さずに捉えること、植民地的思考をたえず倫理的姿勢を教育政策からカリキュラム実践までのあらゆる次元で徹底すること、様々な考え方を知るだけでなく、それが生まれてくる個別具体的な文脈と背景(時代と場所)を追究させるべきことを提起した。



Myrri Komaragiri
PhD Student, University of Toronto
PELSTE EVRI
March 20, 2021
I am incredibly grateful for the opportunity to learn about peace education through PELSTE programmes. I have been able to reflect on the inherent tensions & potential to uphold well-being and justice, and perhaps more directly, the teachers involved in this work. Each of our experiences inevitably shape & process, so I come to this material as a teacher, as someone who works & and refugees, and as someone who researches the relationship between watching the videos, I related it to how peace education could be benefit, experienced conflict, displacement, or structural violence. I would argue education for protection and reconstruction to peace education for social



▲発表資料はこちら

マユリ・コマラギリ氏
(カナダ・トロント大学オンタリオ教育研究所)

フォーマルな学校教育のカリキュラムが、難民のような不利な立場に置かれた人々の知識を排除する「認識論的不公正」に加担してしまう課題を指摘した。また、平和教育は外部からの強制ではなく、地域の人々の願いや経験に根差し、社会から疎外されてきた人々との信頼関係の再構成に傾注するべきことを提起した。

③ ディスカッション (コーディネータ: ラッセル・カビーア, 川口隆行, 丸山恭司)

前半

しばしば過度に政治的に扱われる平和教育が、一方では情緒的で非政治的な教育空間になっているというアンビバレントな現状が指摘された。議論を通して、平和教育実践の再政治化するにあたっては、歴史の中で共時的に生み出された多くの語り・声の存在が確認され、周縁化された語り・声から平和像を再構成していくことの重要性が提案された。

後半

(参加者らも参加)

授業研究部門の参加者であるアグナルド・アロイオ氏(ブラジル・サンパウロ大学)、インディラ・ズブラマニアン氏(シンガポール・南洋理工大学)、ケイシー・ロジャース氏(アメリカ・ウィスコンシン大学マディソン校)も議論に参加した。議論の中で提起された平和教育の理念的デザインを具体的文脈に落とし込み、実践していく必要性が確認された。

Results — 成果

参加者からは、以下の評価コメントが寄せられた。「PELSTEは、地理的な差異を乗り越えて各国各地の教室をつなぐ重要な論点を示し、それに貢献している点で可能性はきわめて大きい」「PELSTEの強みは、平和教育や授業研究に関する時空間を超えた認識論的な学習コミュニティを育成できることである」「PELSTEは、平和教育と授業研究を学際的に統合する点で大きな可能性を秘めている」。あわせてPELSTEが、研究者と実践家がグローバルな研究ネットワークを持続的に構築していく場になることへの期待が示された。



▲成果報告はこちら